

## 第86回 定例研究会 報告

日時: 2024年1月20日(土) 14:00-17:00

場所: 桐朋学園大学 調布校舎 C008

およびオンライン

司会: 安田和信(桐朋学園大学)

内容: 研究会運営委員会企画

### 樋口隆一先生講演会

#### 『新バッハ全集』とわたしの音楽活動

#### 【傍聴記】(近松博郎)

音楽学の分野で貢献されてきた方々を毎年この時期に迎え、ご自身の活動について講演していただく運営委員会の本企画も定着してきた。今回の講演者である樋口隆一先生は周知の通り長年にわたりバッハ研究の第一線で活躍され、国際音楽学会(IMS)副会長等の要職を歴任されたほか、指揮活動にも精力的に取り組まれてきた。こうした華やかな経歴をお持ちの先生のお話しとなれば聴き手は緊張し委縮しそうだが、豊富な写真を用いつつ飾らないお人柄で成功話も苦労話も惜しみなく披露された講演は実に刺激的で希望に満ちたものであった。以下、5つに区分された項目に沿って講演内容を略記する。

#### I 「『新バッハ全集』への道」:

樋口先生の研究人生の原点である本項がもっとも時間をかけて語られた。実際、今回のご講演の白眉といっても差し支えないだろう。慶應義塾大学文学部にて、当時『ハイドン全集』の《バリ交響曲》を校訂していた中野博司氏と出会って音楽の資料研究に目覚め、ゲーテ・インスティテュートでドイツ語会話を学ばれる。1972年6~8月に Bach-Archiv Leipzig に研究滞在し、当時の所長であった W. ノイマンや H. J. シュルツェの指導を受けられた。このとき IMS コペンハーゲン大会に参加。さらにブカレストで国際美学会議にも出席し、会長夫妻の自宅に招待されたエピソードが語られた。樋口先生はこれを「学生の特権」と回想され、若いうちに海外に出ることの重要性を説かれた。この研究滞在中にゲッティンゲン・バッハ研究所も訪問し、副所長であった A. デュルや小林義武氏とも知己を得られた。

1974~79年にかけて DAAD 奨学生としてテュービンゲン大学に留学され、G. v. ダーデルゼンをはじめとする

高名な音楽学者に師事された。ダーデルゼンとの初対面で、私はあなたのもとで博士論文を書きに来たと明言してしまったのが幸いしたとのこと。ダーデルゼンは「mal sehen(考えてみよう)」が口ぐせで、あとで必ず解決策を用意してくれたという温かい人柄が紹介された。このダーデルゼンが学生たちに課した難題が転機となった。すなわち、バッハの《無伴奏チェロ組曲》を伝える3つの筆写譜の関係性を推理せよというものであった。他の学生が3つの筆写譜のうち、アンナ・マグダレーナ・バッハが書いたものを元にして他の2つの筆写譜が書かれたと推論する中、樋口先生は詳細な比較検討の結果、3つの筆写譜は別々に成立したものであり、これら3つが共通して参照した資料がかつて存在したはずだと結論付け、学生中唯一の正解者となった。

#### II 「バッハとシェーンベルク」:

こうして徐々に頭角を現した樋口先生は、『新バッハ全集』I-34「種々の目的のためのカンタータ」の巻(有名な初期カンタータ《神の時は最上の時》BWV 106 ほか7曲を含む)の校訂を任せられ、この校訂研究がテュービンゲン大学の博士論文として認められて帰国。首都圏の様々な大学の非常勤講師、NHK 音楽番組の解説、ドイツ語通訳、評論活動や合唱指揮を務められて1989年に明治学院大学文学部の助教授に就任された。1985年に日本アルバン・ベルク協会事務局長となり機関紙『ベルク年報』第1巻に「バッハとシェーンベルク」を寄稿。樋口先生をシェーンベルク研究に導かれたのは同協会会長の諸井誠氏であったことが明かされた。

#### III 「明治学院バッハ・アカデミーとライブツィヒ・バッハ音楽祭」:

2000年に明治学院バッハ・アカデミーを設立し芸術監督に就任される。2006年にはライブツィヒ・バッハ音楽祭に招待され聖ニコライ教会で演奏。同合唱団を巣立った小山田薫氏と安積道也氏はドイツで教会音楽家として活躍している。

#### IV 「国際音楽学会 IMS と国際音楽資料情報協会 IAML などの国際協力」:

1997~2012年に IMS 日本代表理事、2012~2017年には副会長を務められる。2017年 IMS 東京大会開催に向けて樋口先生が尽力されたことは我々も知るところである。

#### V 「最近の活動」:

昨年6月にはアイゼンシュタット国際ハイドン・シンポジウムで研究発表、ウィーンのオーストリア音楽協会で講演

をされる。ウィーン大学では祖父君の樋口季一郎について講演し、その後バチカンでも講演を重ねられた。本年6月には明治学院バッハ・アカデミー合唱団を率いてライブツィヒ・バッハ音楽祭に参加し、聖トーマス教会の音楽礼拝で演奏予定。その後ウィーンでの公演も予定されている。

質疑応答では、研究生生活で大変だったことは何かとの問いに対して新バッハ全集の校訂だったと答えられた。良い仕事とは大変なものだが、常に助けてくれる人がおり、学会活動も大事だとのこと。また、今回の講演内容のテーマは「チーム・ワーク」だと感じたが、いかにして当時のドイツのチームに入っていたのかという問いには、ドイツ人は基本的に日本人好きでありバッハ協会も世界に輪を広げようとしていた面があったと説明された。

今回の講演中に印象的だったのは、先生が何度か「今日はあまり会場に若い方はみられないようだけれども」とおっしゃっていたことである(実際には20代の若手の姿も数名みられた)。これは先生が特に若手後進への強い眼差しをもって語られたことを示唆していよう。かくも情熱的なご講演の源泉となったのは「学恩は山よりも高し」と述べられた先生の返報のお気持ちであると拝察し深く感銘を受けた。

## 日本音楽学会東日本支部通信 第86号

2024年2月29日発行

発行：日本音楽学会東日本支部

<http://www.musicology-japan.org/east/index.html>

日本音楽学会東日本支部事務局

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋3丁目3番地3号 生光ビル303

Tel & Fax : 03-3288-5616

E-Mail : [higashi@musicology-japan.org](mailto:higashi@musicology-japan.org)